

地域資源を生かし 集落営農を目指して 賑わいと活力溢れる

今月は県内でも指折りの大区画に基盤整備事業を行い、経営・生産の一元化と効率化を行い農業生産性の向上を図り、「集落営農」による集落営農を目指した、農事組合法人「おくたま農産」を紹介します。

◇ハード（基盤整備）とソフト（営農）が両立し 奥玉地区の農業発展へ

奥玉地区の基盤整備事業は、1ヶ所規模の大区画圃場整備による土地利用調整（ハード面）と、農業経営の合理化と担い手農家の育成（ソフト面）を目的に、8つの集落のうち7集落で導入。事業費は約38億円で圃場整備のほか、河川改修や農道、農村公園なども整備。土地改良施設等には組合員が共同減歩により用地を提供し、その用地費で受益者負担の軽減、施設の維持管理、そして農事組合法人化に向けた取り組みが可能となりました。

これまでは7つの集落単位に組織された営農土地管理組合ごとに、集落営農に向けた取り組みを進めてきましたが、水田経営安定所得対策の加入手続きの共通課題も多く、奥玉地区全体の土地改良施設等を共有化し継続的に維持管理すること、農地の利用集積、団地化、生産コストの一層の低減、地区内の多くの労働力の活用など「経営・生産の一元化」をより効果的に実現すべきとの機運が盛り上がり、平成19年3月に7つの集落の構成員339人と経営農用地約175鈔を一本化した農事組合法人「おくたま農産」が設立されました。



◇農業生産性の向上と雇用の確保

生産資材等のコスト削減は限界があり、大区画圃場の優位性を生かし作業機械の大型化による効率的作業と生産性の向上を図っています。

田植えを例にすると、従来の方法では10㍎あたり5千〜6千円、2㍎で10万円の人件費が掛かっていましたが、法人化で機械を大型化し、8条2段施肥の



昨年12月に行った「工房あらたま」の落成式

〈経営概況〉

＜構成員＞ 組合員339人

＜22年度経営耕地面積＞ 単位：ha

栽培内訳	栽培面積
水 稲	102.9
大 豆	12.5
飼料作物 ※1	29.1
飼 料 用 米	12.8
小 菊	4.3
ト マ ト	4.4
その他 ※2	9.4
合 計 面 積	175.4

※1 牧草・デントコーン

※2 えだまめ・スイートコーン・寒締め白菜・エゴマ・そば

田植機を4台導入して、1台あたり3人の作業員で1日2㍎田植えを行い2万1千円と従来の20%程の人件費や作業時間等の軽減をすることができました。その他コンバインやトラクター等の機械も大型化により作業効率の向上を行っています。

また、飼料用米の直播も行っており、今年はずらコンヘリの直播を試験的に実施し、5㍎の圃場を1時間30分で作業が終えることができました。

また、協力組織の各園芸班や園芸農家の組合員と連携して小菊やトマト、スイートコーン、寒締め白菜、枝豆、そば、エゴマなどを栽培。所得の向上や集

〈経営体制〉

経営体制は組合長をはじめとする11人の役員のほか、総務企画部、水稻生産部、大豆生産部、転作生産部、加工販売部の5部門に分れていて、組合員339人で構成する。

また、おきたま農産本体を連携、協力する奥玉地区営農組織連絡協議会を構成する各組合（生産組織、農家組合、管理組合など）を協力組織として位置付けている。

落の活性化、園芸振興、地元的女性やお年寄りなど雇用の場の確保という点でも地域に大きく貢献しています。



農業経営の多角化を目指す

地域の土地は自分たちで守るべき。奥玉地区の農地を守るとともに農業の振興を図り、地域の活性化と環境保全に取り組んでいます。利用権設定された農地の団地化・集積化を図り、効率のかつ生産性の高い農業に取り組み、農業所得の向上と、組合員の共同の利益確保に努めています。

また、農業経営の多角化に向けた加工販売部門については、新設された農産物加工施設「工房あらたま」を活動拠点とし、味噌加工販売や米粉を使ったパン・ケーキづくりにも挑戦するなど、地元女性の雇用の場や交流の場として、6次産業化を図りたい。



代表理事組合長
佐藤 正男さん